

発行所「日本余暇学会 発行人「蘭田碩哉 発行日「平成二十年一月二十五日

日本余暇学会ニュース

第61号

日本余暇学会事務局
〒191-0016
日野市神明1-13-1
実践女子短期大学
生活福祉学科蘭田研究室内
Tel/FAX 042-584-5428
e-mail
yokagakai@mail.goo.ne.jp
Home Page
http://www5d.biglobe.ne.jp/~d-pal/yoka/yoka.htm

これまで働く女性に対する子育て支援としての色合いが強かった政府の「仕事と生活の調和」（ワーク・ライフ・バランス）政策は、労働人口の減少を背景に男性や独身者も含めた仕事と生活のバランスをドラスティックに見直す政策に広がった。昨年末、政府はワークライフバランス憲章と行動指針を策定、ワークライフバランス元年となる今年、日本余暇学会は、これをどのように受け止めるべきだろうか。

ワークライフ・バランス元年に 余暇学の充実

日本におけるワーク・ライフ・バランスの提唱者であるパク・ジョン・スックチャがその著（『会社人間が会社をつぶすワーク・ライフ・バランスの提案』）の中で、Y A H O Oでワーク・ライフ・

「ワーク・ライフ・バランス」を検索したところ約九万件のヒットがあったと記している（二〇〇二年四月）。この数字は本年一月現在、一七五万件に達している。仕事と生活のバランスが社会問題になる中、少

を迫られたり、正規雇用者に長時間労働を強いるような職場環境や、仕事一辺倒の風潮を改めようという提案している。また国や企業などの取り組みの、十年後の目標値も設定している。

大沢真知子が著書（『ワークライフバランス社会へ』）で指摘しているように、柔軟な雇用体系をつくるには、非正社員の問題はかり着目するのではなく、むしろ正社員を問い直すことから始める必要がある。行動指針の中で就業形態にかかわらず、公正な待遇や能力開発機会が確保されることや、働き方に中立的な税・社会保障制度のあり方を検討することが提案されており、社会保障や税制も含めた仕事と生活の抜本的なバランス見直しを図ろうという主張は同意できる。ところが、数値目標の位置づけは不明確で、「憲章」は法的な拘束力もなく、あくまでも各人の「努力」を促すものである。これまで

が充実しなければ、両者のバランスを見直すという気運は高まらないだろう。ワーク・ライフ・バランスを「ライフ」[「レジャー」の面から支え、豊かなものとするために、日本余暇学会が果たせる役割は決して小さくないはずだ。

（山田）

新年を迎えて

日本余暇学会会長 蘭田碩哉



平成とは激動の昭和を抜け出して、平らかなる余暇の季節になるはずだった。それが、バブルの崩壊と長引く不況に押し戻されて、反対に余暇後退の20年になってしまった。しかし、そろそろ転換期である。どうやら政権交代も予感される中で、日本人の暮らしの余暇シフトが進展することを願うや切なるものがある。余暇学の時代の扉を学会員の力を合わせてこじ開けようではありませぬか。

ワークライフバランス憲章骨子

- ・いままぜ仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）が必要なのか。その調和が実現した社会の姿、企業・労働者・国民・国・地方公共団体のそれぞれの役割の基本理念を示す。
- ・調和が図られることで、「就労による経済的自立が可能な社会」、「建康で豊かな生活のための時間が確保できる社会」、「多様な働き方・生き方が選択できる社会」の実現を目指す。
- ・調和を図ることは企業にとって「コスト」ではなく、「明日への投資」として積極的にとらえる。

行動指針骨子

- ・「仕事と生活の調和が実現した社会」を実現するための、企業・国民・国・地方公共団体が取り組むべき施策の方針を示す。
- ・経営者は職場風土の改革、人事評価制度の見直しなどに取り組む。
- ・労使で長時間労働抑制のため、業務見直しや能力向上、労働時間短縮などに取り組む。
- ・国は働き方に中立的な税・社会保障制度のあり方を検討する。
- ・国や企業は短時間正社員などの柔軟な働き方を整備する。
- ・国民一人ひとりが家族や地域の中で積極的な役割を果たす。一人ひとりが、個々の多様性を理解し、互いに尊重しあう。

論談 脱時間人

環境省が一九八八年（昭和63年）に実施した「巨樹・巨木林調査」によれば、幹周三メートル以上の樹木は、全国で六万本以上ののぼるといいます。全国で一番幹周りが太いのは、鹿児島県蒲生町の「蒲生の大クス」（幹周24・22m）だ。

我が国の巨樹には、このクス（楠）の種類が全国的に多いが、その他、屋久島の縄文杉や神社などに多いスギやケヤキ、イチヨウなど様々な樹種がある。これらは、信仰の対象になったり、「峠の本杉」のように地域のシンボルとなったり、いろいろな故事・伝承や禁忌（タブー）を有したり、あるいは独特の呼び名で親しまれていたりする。人を寄せ付けないような山奥にひっそりと残ってきた巨樹ももちろん多いだろうが、逆に人との関わりの中で生き残り、巨樹になったものも少なくない。

巨樹を近くから仰ぎ見た時に、その覆いかぶさるような大きさに圧倒され、時に畏敬の念を抱いた経験を持った人も多いだろう。全国には巨樹に愛着を持ち、巨樹巡りをしている人も多い。中には、日本だけでは飽き足らず、海外の巨樹までも探訪している人もいる。こうした巨樹に関心を持つ人々が集い、「全国巨樹・巨木林の会」（電話〇三二五八二四〇九五五、ホームページ

http://www.kyojyu.co.jp）を設立して、毎年「巨木を語ろう全国フォーラム」を開催している。全国各地では、巨樹による「まちおこし」も盛んだ。

このような巨樹の魅力はなんだろうか。太きさ、太さ、独特の異形・・・人により、巨樹により、その応えは様々だろう。しかし、誰もが認めるのが、人間を超越したその樹齢だろう。幹周りが太くならない樹種でも、永年の風雪に耐えてきたその姿には、息を呑む力強さを感じる。それが畏敬の念ともなり、人々を惹きつける元となるような気がする。つまり、その魅力の根源は「悠久の時」なのだ。

翻って、「余暇」はどうだろうか。そこにもやはり、時間観念がある。余暇のほうは、巨樹の時間観念に比べれば、はるかに短い、まさに「寸暇」と呼ばざるを得ないほどのものかもしれない。私の持論では、「究極の余暇は何もしないこと」は、ある意味では、得がたい余暇の過ごし方だろう。我々日本人、特に現代社会では、これはなかなか難しい。まさに究極の余暇になりつつある。そんな思いで、「自然の中の長時間滞在」をテーマとした研究を行い、「余暇学研究」にも発表している。

釈迦は菩提樹の下で悟りを開いたと伝えられている。全国巨樹・巨木林の会に集う人々も、写真や絵画、文学などの芸術や自然科学の研究、観光、地域振興など、いろいろな思いで、巨樹の下に行き、巨樹を見つめ、巨樹の肌に触れている。余暇学会の本紙読者の皆さんにも、「悠久の時」を経験してきた巨樹の下で、「余暇」について是非思いを巡らし、語り合っていたらきたい。少なくとも、巨樹を訪れることが、すばらしい余暇体験になることは間違いないだろう。

悠久の時 ―巨樹から余暇を考える

共栄大学 高橋進

関東ブロック担当理事

この提案をうけ、高橋理事を中心に、日本余暇学会関東ブロック主催で「巨樹探訪」を実施する予定です。今後の広報などに注目ください。

「編集部より」
今後、このコーナーでは、読者の特徴ある「余暇体験」を中心に紹介したいと考えています。例えば、全国各地の特定の施設を訪ねてデータを集めている「道祖神、水道施設、草野球場など」、珍しいジャンルのホームページ

が長敬の念ともなり、人々を惹きつける元となるような気がする。つまり、その魅力の根源は「悠久の時」なのだ。

翻って、「余暇」はどうだろうか。そこにもやはり、時間観念がある。余暇のほうは、巨樹の時間観念に比べれば、はるかに短い、まさに「寸暇」と呼ばざるを得ないほどのものかもしれない。私の持論では、「究極の余暇は何もしないこと」は、ある意味では、得がたい余暇の過ごし方だろう。我々日本人、特に現代社会では、これはなかなか難しい。まさに究極の余暇になりつつある。そんな思いで、「自然の中の長時間滞在」をテーマとした研究を行い、「余暇学研究」にも発表している。

環境省が一九八八年（昭和63年）に実施した「巨樹・巨木林調査」によれば、幹周三メートル以上の樹木は、全国で六万本以上ののぼるといいます。全国で一番幹周りが太いのは、鹿児島県蒲生町の「蒲生の大クス」（幹周24・22m）だ。

我が国の巨樹には、このクス（楠）の種類が全国的に多いが、その他、屋久島の縄文杉や神社などに多いスギやケヤキ、イチヨウなど様々な樹種がある。これらは、信仰の対象になったり、「峠の本杉」のように地域のシンボルとなったり、いろいろな故事・伝承や禁忌（タブー）を有したり、あるいは独特の呼び名で親しまれていたりする。人を寄せ付けないような山奥にひっそりと残ってきた巨樹ももちろん多いだろうが、逆に人との関わりの中で生き残り、巨樹になったものも少なくない。

巨樹を近くから仰ぎ見た時に、その覆いかぶさるような大きさに圧倒され、時に畏敬の念を抱いた経験を持った人も多いだろう。全国には巨樹に愛着を持ち、巨樹巡りをしている人も多い。中には、日本だけでは飽き足らず、海外の巨樹までも探訪している人もいる。こうした巨樹に関心を持つ人々が集い、「全国巨樹・巨木林の会」（電話〇三二五八二四〇九五五、ホームページ

http://www.kyojyu.co.jp）を設立して、毎年「巨木を語ろう全国フォーラム」を開催している。全国各地では、巨樹による「まちおこし」も盛んだ。

このような巨樹の魅力はなんだろうか。太きさ、太さ、独特の異形・・・人により、巨樹により、その応えは様々だろう。しかし、誰もが認めるのが、人間を超越したその樹齢だろう。幹周りが太くならない樹種でも、永年の風雪に耐えてきたその姿には、息を呑む力強さを感じる。それが畏敬の念ともなり、人々を惹きつける元となるような気がする。つまり、その魅力の根源は「悠久の時」なのだ。

翻って、「余暇」はどうだろうか。そこにもやはり、時間観念がある。余暇のほうは、巨樹の時間観念に比べれば、はるかに短い、まさに「寸暇」と呼ばざるを得ないほどのものかもしれない。私の持論では、「究極の余暇は何もしないこと」は、ある意味では、得がたい余暇の過ごし方だろう。我々日本人、特に現代社会では、これはなかなか難しい。まさに究極の余暇になりつつある。そんな思いで、「自然の中の長時間滞在」をテーマとした研究を行い、「余暇学研究」にも発表している。

会費納入のお願い
平成19年度学会費未納の方は、郵便局にて納入ください。平成19年度会費の納入もよろしくお願ひします。
口座番号:00140-9-729065

新入会員
大倉恭輔
(実践女子短期大学 准教授)

二月

11日 06年度ゲーム市場過去最高 六五二七億円、Wii好調、PS3目録届かず(エンターブレイン)

21日 国立新美術館、六本木に開館

30日 06年度映画市場 日本映画一〇七七億円(前年比31・8%増)、洋画九四八億円(同18・5%減)。

21年ぶり邦画が洋画を上回る。スクリーンは大幅増加、観客は横ばい。(日本映画制作者連盟)

三月

18日 東京マラソン開催、三万八七〇人参加、観衆は一七八万人

25日 三遊亭円楽、落語引退を表明

四月

6日 アメリカ宝くじ史上最高額約四三五億円の当選者決まる。

14日 06年度toto(スポーツ振興くじ)売り上げ低迷、日本体育協会への助成がゼロに。

2日 06年度 東京デイズ ニーランド、ティニーシーの入場者、あわせて二五八

一万六千人、過去最高。

20日 文化審議会、勝鬨、永代橋など、重要文化財11件を指定。

25日 デイケンスを主題としたテーマパーク「ディケンス・ワールド」をロンドン東郊チャタムに建設する計画が発表された。

5日 大阪・エキスポランドでコースター脱輪事故。女性死。

22日 外務省ポツプカルチャー分野での文化外交の一環として、海外でマンガ文化の普及活動を行なうマンガ家を対象にした「国際漫画賞」を創設することを決定。

6月29日に受賞作を発表。

19日 豪華客船クイーンエリザベス二世号がクルーズから引退、アラブ首長国連邦で洋上ホテルになる計画が発表された。

19日 東京・渋谷の女性専用温泉施設で爆発事故。三人死亡。

五月

24日 サッカーくじtoto BIGで当選金六億円が二口出た。

25日 アメリカ映画協会が歴代映画ベスト百を決定。一位「市民ケーン」、二位「ゴットファーザー」、三位「カサブランカ」。

26日 政府は「平成19年版国民生活白書」を閣議決定。



た「ユース五輪」新設を発表。第一回夏季は二〇一〇年、冬季は二年開催予定。

26日 社会経済生産性本部、「〇七年版レジャー白書」を発表。余暇市場前年比1・6%減、七八兆九二二〇億円。ギャンブル離れ進む。

9日 日本中央競馬会は〇八年から複数のレースで馬券売上金額の5%を上限にした金額を、払戻金に乗せしてファンに還元する制度の導入を明らかにした。適用レースは「日本ダービー」などになる見込み。従来より配当金が高めになる。

30日 日光国立公園から尾瀬地域が分離され、29番目の国立公園「尾瀬国立公園」が誕生。

10日 秋田大大学院「自殺予防学コース」を二〇〇八年度に新設と発表。

11日 東京都、IOCに二〇一六年夏季オリ

八月

24日 サッカーくじtoto BIGで当選金六億円が二口出た。

25日 アメリカ映画協会が歴代映画ベスト百を決定。一位「市民ケーン」、二位「ゴットファーザー」、三位「カサブランカ」。

26日 政府は「平成19年版国民生活白書」を閣議決定。

9日 日本中央競馬会は〇八年から複数のレースで馬券売上金額の5%を上限にした金額を、払戻金に乗せしてファンに還元する制度の導入を明らかにした。適用レースは「日本ダービー」などになる見込み。従来より配当金が高めになる。

30日 日光国立公園から尾瀬地域が分離され、29番目の国立公園「尾瀬国立公園」が誕生。

10日 秋田大大学院「自殺予防学コース」を二〇〇八年度に新設と発表。

11日 東京都、IOCに二〇一六年夏季オリ

5日 国際オリンピック委員会、14〜18歳を対象にし

人と人との「つながり」の薄れ、「心の病」が増加。「ワーク・ライフ・バランス」の重要性を訴えた。

4日 二〇一四年、冬季オリンピック開催都市はロシア・カスピ海沿いのリゾート地ソチに決定。

5日 国際オリンピック委員会、14〜18歳を対象にし

七月

人と人との「つながり」の薄れ、「心の病」が増加。「ワーク・ライフ・バランス」の重要性を訴えた。

4日 二〇一四年、冬季オリンピック開催都市はロシア・カスピ海沿いのリゾート地ソチに決定。

5日 国際オリンピック委員会、14〜18歳を対象にし

九月

10日 秋田大大学院「自殺予防学コース」を二〇〇八年度に新設と発表。

11日 東京都、IOCに二〇一六年夏季オリ

5日 国際オリンピック委員会、14〜18歳を対象にし

書評

瀬沼克彰 『進化する余暇事業の方向』
学文社 2007. 11



本書は余暇事業の「供給面」に着目し、概観、特性、今後の方向、諸制度、行政などについて幅広く論じている。多数の参考文献や資料を引用しており、余暇供給に関してどのような研究がなされ、どのような報告がされてきたのかを長いスパンで見ることができ、著者の余暇事業研究歴の長さや幅広さが反映されている。これまでの著書について著者は内容を「詰め込めるだけで詰め込んでしまった」ことを冒頭で反省しているが、本書でもその傾向は変わらないようだ。だが余暇供給に、まだ未熟な評者には、むしろ良書と感じた。しかし読後、いくつかの不満が残った。日本における余暇の不在状況を「民族性」に言及している部分があるが、昨年の研究大会であきらかなったように、この指摘はすなおに受容できない。近年、個人の自助努力による、余暇拡大に限界がある

このような、斬新な将来の余暇像を聞かせて欲しかった。多くの「瀬沼ファン」は余暇事業の停滞に「喝!」を入れるような一冊を望んでいるはずだ。[山田]

ンピック開催地正式立候補を伝える。政府は「東京五輪」立候補を閣議了承。

「十月」

4日 人々を笑わせ、考えさせてくれた研究を遠藤イグ・ノーベル賞で日本人研究者が化学賞を受賞した。

ウシンの排泄物からバニラの香りの成分「バニリン」を抽出する研究をした功績が認められた。

14日 さいたま市にJR「鉄道博物館」が「鉄道の日」に開館し、親子連れや鉄道ファンら約九四〇〇人が詰めかけた。

19日 ミシユラン東京版の内容が明らかに。三つ星は八店（22日に発売）。

22日 五歳児の過半が習い事とゲームを始めていることが明らかに。前年調査より大幅増加（厚労省調査）。

3日 「二〇〇七年 国民の豊かさランキング」、日本は七位、一ランク後退。一位はルクセンブルグ、二位はノルウェー、三位はスウェーデン（日本生産性本部）。

「十一月」

4日 「二〇〇七年ヒット商品番付」東の横綱「Wi-i」、西の横綱「P.A.S.M.O」（S.M.B.C.コンサर्टイック発表）。

5日 政府にtoto廃止論浮上。

18日 「郷土料理百選」を発表（農林水産省）。

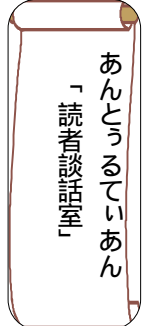
19日 政府は08年10月に「観光庁」創設することを発表。

「十二月」

はじめに断っておく必要がある。僕が専門としている研究分野は、広義での社会学、狭義ではカルチュラル・スタディーズ（日本で呼ばれている「カルスタ」

ではなく、欧米における本来的「カルチュラル・スタディーズ」という意味）、あるいはポピュラー文化研究で、少なくとも余暇学や余暇研究ではない。つまり、僕の研究の核となっているのは「文化」で、「余暇」は副次的なものだ。もちろん、だからといって、僕は余暇研究を軽んじているわけではない。余暇学が独立した学問分野として認知されているかどうかには疑問の余地があるものの、それが学問領域のひとつに値することは間違いないと、僕は考えている。

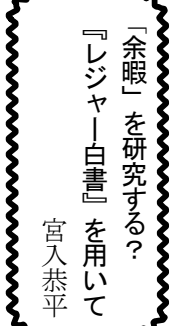
僕が余暇研究を自身の研究に取り入れたきっかけは、カフオケからみられる日本とアメリカの文化比較をおこなうために参照した論文だった。アメリカのカフオケ研究の第一人者であるロブ・ドリュウが書いたその論文は、アメリカの芸術ジャーナル『レジャー・スタディーズ』誌に掲載されている。アメリカのカフオケがレジャー・スタディーズとして研究されているのであれば、日本でそれを該当するのは余暇学ということになるはずだ。



あんどうのていあん
読者談話室

第60号で『レジャー白書二〇〇七』をベースに各位の研究領域と絡めて、発言を求めたところ、投稿がありました。今回は宮入会員の投稿を掲載します。

「余暇」を研究する？
『レジャー白書』を用いて
宮入恭平



余暇学会に参加する以前の僕にとつては、レジャー・スタディーズが余暇学とイコールで結ばれることはなかった。事実、僕が目にした学会誌『余暇学研究』への投稿論文の多くは、僕自身の研究アプローチとはまったく異なるものだった。それにもかかわらず、僕を余暇学会に参加させたのは、アメリカにおけるレジャー・スタディーズの学術的アプローチだった。つまり、たとえば日本における既存の余暇学がレジャー・スタディーズの研究アプローチと異なっている、僕が手本とするレジャー・スタディーズのアプローチを余暇学会に用いたところで問題はないだろうと考えたわけだ。

実際のところ、僕の研究が『余暇学研究』で受け入れられるのだろうかという不安はあったものの、僕はカフオケを文化的側面から再考する意味があると確信していた。そのために、余暇としてのカフオケという事象を分析する必要があった。そこで用いたのが、『レジャー白書』だった。

幸いにも『レジャー白書』には、長期にわたるカフオケに関するデータが蓄積されていた。そのおかげで僕は、自身の論文に具体的なデータを加えることができただけでなく、『レジャー白書』には、データだけが掲載されているわけではなく、その時代の「トレンド」を扱う特集も組まれている。たとえば、最新の『レジャー白書二〇〇七』では、余暇としての観光をピックアップした特別レポートが掲載されている。言うまでもなく僕は、新たな論文のためにそれを活用している。僕にとつての余暇研究は、目的ではなく手段だ。しかしそれは、目的を達成させるためには欠かせないことのできない、重要なものとして存在しているのだ。

これからも会員の皆様方の投稿を受け付けます。次号は「みんなに知らせたいこの本、あの論文」というテーマにします。余暇学に関連した書籍や学術論文、政府を含めた報告書や白書など、会員で共有したい情報源をおしらせくだ
さい。近刊のものに限らず、ホームページ、講演会などでも結構です。字数は八百〜千二百字、締め切りは三月末日です。余暇学会事務局までメールまたは郵送でお送りください。なお、採否は編集部で決定、発表は紙上掲載に代えます。
へんしゅうのあと
はかま満緒氏が年末に出版した『世界が嗤う日本のジョーク』が静かなブームをよんでいる。単なるネタ本でなく人間関係をよくするジョークのコツを伝授する本である。近隣区市の図書館蔵書をインターネットで検索すると常に貸し出し中、予約も多い。海外のジョークを翻訳ではなく、日本人が日本語で考えたところに意味がある。本書は近年「ジョーク文化」が消失しつつあることを憂うが、多くの人が、この潤滑油で人間関係の充実を望んでいるのか。いずれにしても落ちていく将来の生活を見通せ、充実した余暇が過ごせるワークライフバランスの構築が達成されて、初めてこの潤滑油が生きるだろう。（山）